

近代落合を素材とした地域学習

— 3.11後の地域学習を落合から考える —

Learning from the Community for Modern Times in the Ochiai Area

— Thinking of the Community Lessons Learned from 3.11 in Ochiai —

福井 延幸

(Nobuyuki FUKUI)

I. はじめに

1. 問題の所在

2011年3月11日に発生した東日本大震災により被災された皆様、そのご家族の方々に対し、心よりお見舞い申し上げます。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災は、時代の大きな転換点となった。私たちの生活に対する意識は、効率追求の価値観から人と人とのつながりを重視するような精神的な豊かさを求める方向へ変化している。生活の基盤となる、私たちが暮らす「まち」についてもその中に暮らす人々の絆が重視されるのである。つながり、絆、忘れられていた地縁的結合。助け合いの基盤単位となるのが「まち」である。そのような「まち」に対する愛着がより一層もてるようになるよう地域学習について考察していく。

3.11後の地域学習について考えると、これまでよりもシンプルでかつ強い心の結びつきはぐくむ必要があるだろう。その際のキーワードとなるものが「まちがすき」という感覚であると考えられる。シンプルな心のつながりである「まちがすき」という感覚で結びついた人びとによって担われるまちづくり、「まち」を支える社会の担い手を育てていこうとする試みが必要である。殊に人と人とのつながりが薄い都市の中で、まちの持つ魅力にいかにか愛着を持たせうるか、まちの魅力をいかにか引き出すことができる素材を発見し、教材を開発するかということが地域学習において重要になる。

「まちがすき」と感じるまちの魅力として、長い時間かけて受け継がれてきた「歴史と文化」が大きな要素となっている。今日、多くのまちで伝統的・歴史的な地域資源によるまちおこしがさかんに行われている。また、地域の伝承に学ぶことの必要性は、今回の震災の津波被害に際しても、かつて国定教科書に掲載されていた「稲むらの火」や防災伝承としての「津波てんでんこ」などが再評価されていることを見ても自明なことであろう。地域の伝承やまちの持つ「歴史と文化」の魅力というものを考えたときに、それは単なる過去の蓄積によるものだけではなく、新たなコミュニケーションによって再生産され、生まれ、受け継がれていくものだろう。まちの中では暮らす・学ぶ・働く・遊ぶといったさまざまなコミュニケーションがなされ、感性が刺激されることで、その中から新たな創造性が生まれ、新たな「歴史と文化」が

育まれていくのである。

歴史と文化の融合によって、まちに暮らす人々が、まちに誇りと愛着が持てるようなまちづくりが必要である。そしてまちの持つ「歴史と文化」の魅力を発信していくことによってまちの魅力に広がりが生まれる。そこにある蓄積されたものを利用するだけでなく、発信力が非常に重要となる。まちは、文化を育んできた。多くの人に感激を与え、楽しさを提供できることが重要だろう。感激や楽しさを広げていけるように、まちの文化の発信力は強くあるべきである。まちに暮らす人々がわがまちに誇りと愛着を持てるように、そしてまちに暮らす人々のまちがすきであるという欲求に応えていかねばならないだろう。

この問題を落合地域に引きつけてみよう。「落合らしい文化」とは何か。「落合らしさ」ということを考えたときに「歴史と文化」の融合という視点が極めて重要となってくる。落合に暮らす人々が相互にコミュニケーションをとる中で「歴史と文化」を結びつける形で、まちづくりを図ることが大切になる。これによって落合のまちの魅力を一層高めることができると考える。

落合のまちの魅力を形づくるものとして、「歴史と文化」という視点から、特に近郊農村から都市へと変貌を遂げた近代について考えたとき、その特徴として「染色」、「文化人」、「遺跡」を挙げることができよう。染色については、印刷業とならんで新宿区の地場産業である。染色業は大正末から昭和初期にかけ発達し、現在もまちに息づく産業の一つとして落合地域を特徴づけている。文化人については、大正末の「目白文化村」の建設以前より周辺には文士や芸術家などが集まるようになった。さながら落合は芸術文化の一大拠点であるような時期があった。遺跡に関していえば、落合遺跡は都内でも有数の拠点集落であり、人々は古くよりこの落合の地に居住していた。このことは近代から現代において詳細に調査によって解き明かされつつある。

本稿では近代の落合を特徴付ける「歴史と文化」を「染色」・「文化人」・「遺跡」の三つに焦点をあてて論考を進めていく。

2. 学習指導要領中の身近な地域の取扱い

身近な地域について、平成23年度より全面実施された小学校学習指導要領 第2章各教科 第2節社会科 第3 指導計画の作成と内容の取扱いでは、1. 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。として、

- (1) 各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること。
- (2) 博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。

という。

(1)については、「『地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする』ことについては、地域にある素材を教材化すること、地域に学習活動の場を設けること、地域の人材を積極的に活用することなどに配慮した指導計画を作成し、児童が興味・関心をもって楽しく学習に取り組めるようにすることを求めている。各学校においては、まず、教師自身が各学校の置かれている地域の実態把握に努め、地域に対する理解を深めるようにする。そして、地域の素材をどのように受けとめ、地域の人々や施設などからどのような協力が得られるのかを明確にする必要がある。それらをもとに、地域の素材を教材化し、地域の施設を積極的に活用したり地域の人々と直接かかわって学んだりする学習活動を位置付けた指導計画を作成することが大切である。』¹⁾と地域学習に対する教師の態度について言及されている。地域素材の教材化に際し、①地域の実態把握、②地域素材の評価、③地域からどのような協力を得られるか、という点が問題とされている。それにはまず教師自身が、まちをよく歩き、よくまちを見て、「まちがすき」でなければならない。

また、(2)については、「社会科の学習に活用できる博物館には、歴史博物館や郷土資料館のほかに、例えば魚や自動車などに関する博物館、水道、電気、ガス、原子力など資源・エネルギーに関する博物館、農業や漁業、林業、伝統的な工業などの地場産業に関する地域産業振興センターなど、多様なものがある。地域にあるこれらの施設を積極的に活用することによって、児童の知的好奇心を高め、学習への動機づけや学習の深化を図ることができる。また、諸感覚を通して実物や本物に触れる感動を味わうことができる。学校での積極的な活用を通して、これらの施設を自ら進んで利用できるようになる。そのことは生涯にわたって活用する態度や能力の基礎となるものである。」²⁾と、地域の施設の利用によるメリットとして①児童の知的好奇心が高まる、②学習への動機づけ・深化、③実物、本物に触れる感動があげられている。さまざまな体験に基づく感動は「まちがすき」を児童・生徒の心の中にはぐくむのである。

新教育基本法には、第2条 教育の目標の5の教育の目標の一つとして、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と愛国心・愛郷心が強調されているが、3.11後は地域の人々のつながり、絆が重視されるなかでより「郷土」の部分が強調されるべきであろう。

Ⅱ. 落合の染色業

1. 近代落合の特質

近世落合地域の特質については、拙稿³⁾でもとりあげているが、江戸近郊農村、都市の周縁としての特質をもつ。この特質は明治以降にも引き継がれていくが、大正12(1923)年の関東大震災は、落合地区の近世から近代にかけての江戸近郊農村としての性格を失わせることになった。落合地区の農業は押し寄せる人口の増加と近代化の余波を受け衰退していくのである。

人口の増加については大正9(1920)年の落合村の人口が7,736人であるのに対し、昭和5

(1930)年のそれは30,592人とおよそ4倍に増加している⁴⁾。この関東大震災や昭和2(1927)年の西武鉄道(村山線)の開通も影響し、落合は住宅街として開発が進んでいく。大正末期に開かれた目白文化村をはじめ、昭和初期には葛ヶ谷村(現西落合)において耕地整理が行われるなど郊外住宅地開発が先駆的に進み、昭和8(1933)年に妙正寺川一帯は風致地区に指定されるなど、みどり豊かな近郊市街地をめざした試みがいくつも展開された⁵⁾。

2. 落合の染色業の歴史

『淀橋区工業概況(昭和3年)』によれば落合地区の大正10年における工場数は13であるのに対し、昭和3(1928)年のそれは34、職工数は大正10(1921)年が501人に対し昭和3年が885人、生産高は大正10年が2,013,579円なのに対し、昭和3年が4,379,695円となっている⁶⁾。大正末期から昭和初期にかけて飛躍的に工業が発展している様子が見て取れる。昭和7(1932)年刊行の『落合町誌』には、「旧神田川沿岸一帯は水質良好なる関係上晒染、製氷、衛生材料等、概して利水の工場多く設立せられて、工業地域を形成す、商業は未だ振はず、日用食料の小売業者多きを占む、昭和六年末町内に於ける会社の数は三十三社にして、其種別は株式会社十七、合資会社十四、合名会社二である。工場法を適用せらるる工場数は三十三を算し、其算額は経済界不況の影響により不振の状態にありと雖も、加工賃を含めば金五百三十余万円を挙げ、従業員数千二百余名を置けり。」⁷⁾と「晒染」、「製氷」、「衛生材料」など水を多く必要とする工業の落合地域での発展を記録している。殊に落合地域では、妙正寺川・神田川の水利を活用しての染物・晒業が発展していく。現在に至るまで、染色業は新宿区の地場産業となっていくのである。

『東京府豊多摩郡誌』によれば、大正4(1915)年末現在の落合村の職業別戸数で工業に分類されているのは202戸。うち「染、晒、練業」は1戸にすぎず、まだ染色業は盛んではない⁸⁾。ところがその後、昭和5(1930)年発行の『日本地理大系 第3巻 大東京編』の「染織工場分布図」によると高田町・戸塚町・落合町方面に職工数5人以上の中小規模の染色工場が密集していることが見て取れる⁹⁾。しかしまだ昭和5年の段階では落合町の染色工場数は、高田・戸塚の両町に比べて少ない。上落合の小紋「二葉」会長の小林繁雄によれば、「その時分、山手線の外側は一面の田んぼと畑だ。昭和のはじめになって西武電車が敷けてから、やっと家がぼつぼつ建ちはじめたんです。昭和六年から七年にかけて、染物関係の一一業種一八軒を、この近所に呼び集めた。ここへ来れば、染めのことならなんでも間に合うってわけだね。」¹⁰⁾と昭和6～7年ごろに染色業が集約された工業団地的地域が形成されていたことが記憶されている。落合の染色業の本格的発展は、高田・戸塚・落合の同地域内でも多少遅れ気味になっている。

ではなぜ落合と染色業が結びつくのかというと、中落合の小紋「石井」の二代目当主石井正一によれば、「江戸の染物屋は、神田紺屋町っていう名前がいまでも残っているくらいでして、もとは神田や浅草に多かったんです。それが、染料によくない鉄分がなるべく少ない、弱アル

カリ性から中性の水を迫って、神田川の大曲付近へ、そして江戸川橋の辺からさらにいまの落合へと、流れをさかのぼってきたんですね。川の水だけじゃありません。私たちの大量に使いますのは、主に地下水です。」¹¹⁾と、もともと神田や浅草に多かった東京の染物業が、染色に適した良質な水を求めて落合地域に移転してきた経緯が述べられている。移転時期としては、高田・戸塚・落合町の広い範囲では関東大震災の後に多く移転してくるが、落合地域についていえば若干遅れて昭和6～7年ごろに増加するようである。

戦後の染色業の状況については、『新宿区史』に昭和20年代後半のものであろう、新宿区の工業地帯として中井を陸橋からみた写真が残されている。写真にみられる染色業（或は薬品製造業）が妙正寺川と神田上水の流域にあたる地と特徴づけているとし、それは中小企業が圧倒的に多く、その経済的に弱体なものも1つの問題となっている¹²⁾。と指摘している。落合の染色業はその発生当初より現在に至るまで中小企業中心で続いている。中小企業中心の経営形態は、現状においても大きく変わりはないが業界・地域の活性化のための様々な努力が続けられている。

3. 現在の落合の染色業

現在、染色業は新宿区の地場産業として広く認知されている。新宿区内には、染色業関係の組合として東京都染色工業協同組合と東京都工芸染色協同組合の2つが所在する。東京都染色工業組合は主に東京染小紋を伝える企業から組織されている。東京都工芸染色協同組合は主に手描友禪を伝える組合員によって組織されている。

東京染小紋は江戸小紋ともよばれ、その技術は室町時代にはじまるとされる。鎧の革所や家紋などに用いられていたが、江戸時代に入り武士が着用した袴の染色技術として発達した。藩ごとに異なる定小紋が決められ、諸藩の武士が集まる江戸でその技術が高められた。江戸時代も中ごろになると町人の間でも小紋が流行し、男性だけでなく、女性にも広まった。昭和51（1976）年6月2日、通商産業大臣から伝統的工芸品として指定されている。

東京染小紋の型紙は、三重県伊勢白子の熟練技術者によって手彫りされる。この型紙を使用した型染技術に優れているのが東京染小紋の特徴でもある。なお、仕上げのしは外注に出す場合もあるが、糊作りから地直しまでを1人の職人で行うことが東京染小紋の特徴であり、職人芸の域に達するのもこの点である¹³⁾。

友禪染は、天和－元禄年間（1681-1704）に活躍した京都の扇絵師宮崎友禪により創始されたと伝えられる。京友禪や加賀友禪が知られるが、東京手描友禪は江戸時代中期に友禪の染師が江戸に移り住むようになり、友禪染の各種技法を持ち込んだものが発展したものである。京友禪・加賀友禪は古典的な図柄・色彩であるのに対し、東京手描友禪の特徴は、渋く落ち着いた色合いの中にも、都会的センスのある洒落感が漂う作風とされる。昭和55（1980）年3月3日、通商産業大臣から伝統的工芸品として指定されている。

東京手描友禪では下絵、色さし、仕上げを模様師が行い、その他の過程をそれぞれの専門業

者に依頼する方法が用いられている。このため、生産地の周辺には模様師、染色業者などの関連業者が集中して存在している¹⁴⁾。

また、新宿区内には染小紋、友禅模様、糊画、紋章上絵、刺繍等の着物産業に携わる人たちが構成されている新宿区染色協議会がある。各会員は、業種を超えて相互の情報交換、連絡調整を図り、業種別団体が共同して新商品の開発・研究、作品の発表会や展示即売会等を開催するなど、業界の振興・発展に努力しており、また、新宿区が開催する染色文化展の中で、作業の実演、技術の公開を通して、広く染色産業全般の啓蒙に努めている¹⁵⁾。

平成22（2010）年2月18日から20日にかけて、中井駅前の商店街と寺齊橋から大正橋の間の妙正寺川で「染の小道」実行委員会が主催するイベント「染の小道」が開催された。昭和30年代ごろまで落合・中井の風物詩だった染物を川で水洗いする風景を現代によみがえらせようとしたものである。「染の小道」は、落合・中井を「染めの街」として再び日本や世界へ発信すること、そして、地域が大切にしてきた価値や環境を多くの方々に直接体験してもらい、地元の活性化につなげることを目的とした、住民主体のイベントである。平成21（2009）年から開催し3回目となる今回は初の試みとして、妙正寺川の川面に反物を張る「川のギャラリー」、商店街50店舗の軒先に、作家が製作した「のれん」を展示する「道のギャラリー」を展開。3日にわたり染め物が中井の街を彩った。3日間の来場者数は約4400人という大イベントであった¹⁶⁾。

Ⅲ. さまざまな作品に登場する落合地域

1. 佐伯祐三アトリエ記念館

画家佐伯祐三は明治31（1898）年4月28日に、浄土真宗本願寺派光徳寺第14代住職佐伯祐哲、母タキの4男3女の次男として生まれた。大正6（1917）年、大阪府立北野中学校を卒業した後、東京小石川の川端画学校に入り、藤島武二に師事する。大正7（1918）年には、東京美術学校西洋画科に入学し、東京美術学校在学中の1920（大正9）年、銀座の象牙美術商の娘池田米子と結婚。大正11（1922）年長女弥智子が生まれている。大正10（1921）年に洋画家中村彝のアトリエに程近い豊多摩郡落合村字下落合661番地（現・中落合二丁目）にアトリエ付き住宅を新築した。大正12（1923）年に東京美術学校を卒業し、同年妻子とともに渡仏。帰国後の大正15（1926）年ごろより自宅・アトリエのある落合地域付近を描いた連作「下落合風景」に取り組む。昭和2（1927）年に2度目の渡仏をするも翌年咯血。精神も病み昭和3（1928）年8月16日、パリ郊外のヴィル・エヴラル精神病院で死去した。享年30歳。

佐伯祐三が、落合で生活し、創作活動を行ったのは、前記下落合661番地にアトリエ付き住宅を新築した大正10（1921）年から1回目の渡仏をする大正12（1923）年までと、大正15（1926）年に帰国し、再び渡仏する昭和2（1927）年までの4年余りにすぎない。しかし、この落合の地は、佐伯がアトリエを構え、創作活動拠点とした日本で唯一の場所であり、妻米子が昭和47（1972）年に死去した後、昭和48（1973）年に新宿区がこの地を購入した。昭和50

(1975)年に新宿区立佐伯公園として開園し、当時のままの敷地に、大正期のアトリエ建築が保存された。新宿区はこのアトリエを、新宿に残る大切な「土地の記憶」、「まちの記憶」として保存・継承し、広く発信していくために、新宿区立佐伯祐三アトリエ記念館として整備し¹⁷⁾、平成22(2010)年4月28日より公開している。

また現在、佐伯祐三アトリエ記念館に続き、下落合三丁目のにこのる画家中村彝の旧アトリエを記念館として整備し、平成25(2012)年3月から公開することが計画されている。近隣や町会、公募区民が、研究者や区職員とともに月1回ワークショップを行い、記念館の整備方針について5回にわたって話し合った¹⁸⁾。自治体、地域住民の協働による「まちの記憶」の保存、発信作業が落合地域では続いている。

2. 「下落合風景」について

佐伯祐三の残した作品群の中に落合にゆかりの深いものとして一連の「下落合風景」がある。「下落合風景」は、朝日晷氏によれば60点余が存在した作品として確認でき、戦災で焼けてしまった作品、あるいは個人に秘蔵されて表に出ない作品、さらには佐伯作品と気づかれずに死蔵されている作品などを差し引くと、現在40数点ほどの画像を確認することができる。100点を超える「下落合風景」が、描かれていたのではないか¹⁹⁾という指摘もある。

下落合を歩く佐伯祐三 —「下落合風景」の描画ポイントをたどる—²⁰⁾には一連の「下落合風景」が描かれた場所についての詳細な考証がなされている。「目白文化村」ができ開発が進み、近郊農村としての風景を失いつつあった転換期の落合の姿を写し出している。下落合風景からは、「日本の風景は絵にならん」と友人にこぼしていた言葉とは裏腹に、もうひとつ別の新たな表現をポジティブに模索し追究していた、佐伯の旺盛な創作欲や情熱のモチベーションを感じ取ることができ²¹⁾るという評価もあり、落合の風景が佐伯の画業の転換点に果たした役割がうかがえる。

3. 林芙美子記念館

作家林芙美子は明治36(1903)年、福岡県門司市大字小森江で林キクの婚外子として生まれた。実父は愛媛県出身の行商人宮田麻太郎であるが、麻太郎が認知しなかったので、「林フミコ」として、キクの弟林久吉の姪として籍に入った。戸籍上の誕生日は12月31日となっている。大正11(1922)年、尾道市立高等女学校を卒業後に上京。職を転々とし苦労も多かったが、『放浪記』が刊行された昭和5(1930)年、豊多摩郡落合町大字上落合字三輪850(現・上落合三丁目)に転居。昭和7(1932)年には区制が敷かれ淀橋区となった下落合四丁目2133番地(現・中井二丁目)に転居した。昭和14(1939)年には、同下落合四丁目2096番地24(現・中井二丁目、林芙美子記念館の地)に土地を購入。家屋の建築工事に入り昭和16(1941)年完成。以後昭和26(1951)年6月28日に48歳で急逝するまでこの地に住んだ。平成元(1989)年、夫緑敏死去の後、遺族からの寄贈を受けて林芙美子記念館として平成4(1992)年3月22

日開館した。

林芙美子は、この家を建てるにあたって「私は、まづ、家を建てるについての参考書を二百冊近く求めて、およその見当をつけるやうになり、材木や、瓦や、大工に就いての智識を得た。」(中略)「東西南北風の吹き抜ける家と云ふのが私の家に対する最も重要な信念であつた。客間には金をかけない事と、茶の間と風呂と厠と台所には、十二分に金をかけると云ふのが、私の考へであつた。」²²⁾と考へた。

建築は山口文象に設計を依頼し、何度も担当者と打ち合わせをしながら設計案を練った。当時は戦時中であつたため、建築規模に制限があり、住宅は一棟あたり床面積30.25坪以内とされていた。そこで、建築許可を得るために建物を各々約30坪の二棟にわけ、一棟を芙美子名義の主家(生活棟)とし、もう一棟を夫緑敏名義の離れ(アトリエ棟)とした。芙美子は自分のイメージを伝えるために、設計担当者と大工を連れて京都まで民家や茶室を見学に行ったり、深川の木場まで材木を選びに行っている²³⁾。

現在は、芙美子が執筆を続けた書斎などが往時のまま残され、夫の緑敏のアトリエは、夫妻の写真や芙美子自画像などを展示する資料室となっている。

4. 「落合町山川記」について

林芙美子による「落合町山川記」という随筆に落合地域についての昭和初期の描写がある。「落合町山川記」は『改造』昭和8(1933)年9月号に掲載された。掲載当時は『放浪記』がベストセラーとなって作家としての地位を確立し、既に下落合に転居後であつたが、上落合に住んでいた当時(昭和5~7年)のことが回想する場面から筆がすすめられている。佐伯祐三の「下落合風景」より若干後の時代の落合の様子である。以下に落合地域に関する記述を拾ってみる。

「東中野の駅までは私の足で十五分であり、西武線中井の駅までは四分位の地点で、ここも、妙法寺の境内に居た時のように、落合の火葬場の煙突がすぐ背後に見えて、雨の日なんぞは、きな臭い人を焼く匂いが流れて来た。その頃、一帖七銭の原稿用紙を買いに、中井の駅のそばの文房具屋まで行くのに、おいはぎが出ると云う横町を走って通らなければならなかった。夜など、何か書きかけていても、原稿用紙がなくなると、我慢して眠ってしまう。ほんの一、二町の暗がりの間であつたが、ここには墓地があつたり、掘り返した赤土のなかから昔の人骨が出て来たなどと云う風評があつたり、また時々おいはぎが出ると聞くと、なかなかこの暗がり横町は気味の悪いものであつた。その頃はまだ手紙を出すのに東京市外上落合と書いていた頃で、私のところは窪地にありながら字上落合三輪と呼んでいた。その上落合から目白寄りの丘の上で、おかしいことに下落合と云って、文化住宅が沢山並んでいた。この下落合と上落合の間を、落合川が流れているのだが、(本当は妙正寺川と云うのかも知れぬ)この川添いにはまるで並木のように合歡の木が多い。五月頃になると、呆んやりした薄紅の花が房々と咲いて、色々な小鳥が、堰の横の小さい島になった土の上に飛んで来る。」²⁴⁾とまだ中井駅周辺もさほ

ど開発が進んでいない様子が描写されている。妙正寺川のほとりにも合歓の木が多く、のどかな風景がしるされている。

目白学園の斜面から中井御霊神社南側にかけての妙正寺川流域の「バツケ」の様子についても、「落合川に添って上流へ行くと、「ばつけ」と云う大きな堰があった。この辺に住んでいる絵描きでこの堰の滝のある風景を知らないものはもぐりだろうと思われるほど、春や夏や秋には、この堰を中心にして、画架を置いている絵描きたちが沢山いた。中井の町から沼袋への境いなので、人家が途切れて広漠たる原野が続いていた。風をあげている人や、模型飛行機を飛ばしている人たちがいた。うまごやしの花がいっぱいだし、ピクニックをするに恰好の場所である。」²⁵⁾ としるされている。

目白商業についての記述もある。「夕方など、このばつけの板橋の上から、目白商業の山を見ると、まるで六甲の山を遠くから見るように、色々に色が変わって暮れて行ってしまう。目白商業と云えばこの学校の運動場を借りてはよく絵を書く人たちが野球をやった。のんびり講など云うハッピーを着た連中などの中に中出さんなんかも混っていて、オウエンの方が汗が出る始末であった。」²⁶⁾ と実にのどかな風景である。

林美子が落合に引越してきて数年後であろう時期の記述がある。「私の仲のいい友達が、中井の駅をまるで露西亞の小駅のようだと云ったが、雨の日や、お天気のいい夕方などは、低い線路添いの木柵に凭れて、上落合や下落合の神さんたちや奥さんたちが、誰かを迎いにしている。駅の前は広々としていて、白い自動電話があり、自動電話の前には、前大詩人の奥さんであったひとがワゴンと云う小さなカフェを開いている。自動電話に添って下へ降りると落合川だ。嵐の日などは、よくここが切れて、遠まわりしなければ帰れなかったのだが、この川を半分防岸工事をして、小鳥屋だの西洋洗濯屋だの麻雀荘と、もう次々に出来てしまって、この頃は夜々駅の横に植木市がたった。この植木市には時々見覚えの合歓の若木などが売りに出ている事がある。植木市と云っても本格的なものではなくてカアバイトの光と撒き水きりで美しく粧っている品物が多かった。でも値段が安いので、私は蔓薔薇や、唐辛子の鉢植えなどを買いに行った。「まるで気絶したようなんね」と、冷やかすと、怒りながらまけてくれた。八分ごとに来る電車で、友達が来るのを待っている間に、待呆けを食って、花鉢を五ツ六ツも買わされた事もあった。どっかいいところをと思っているのだけれど、落合は気楽なところだ。もう私の家の壁の汚点一ツ覚えてしまったのだが……。」²⁷⁾ と開発が進みつつある中井駅周辺や護岸工事が進む妙正寺川の様子が描かれている。

そして最後に「いまのところ、落合の町より外にそう落ちつける場所もなさそうだ。この住みよさは四年もいるのによるだろうが、町の中に川や丘や畑などの起伏が沢山あるせいかも知れない。」²⁸⁾ と結ばれている。また、同じく林美子の随筆「わが住む界限」にも、「私は冗談に自分の町をムウドンの丘だと云っている。沢山、石の段々のある町で、どの家も庭があって、遠くから眺めると、昼間はムウドンであり、夜はハイデルベルヒのようだ。住めば都で、私もこの下落合には六、七年も腰を落ち着けているがなかなか住みいい処だ。」²⁹⁾ と落合について

の愛着がつづられている。

5. 落合地域と赤塚不二夫

漫画家赤塚不二夫は、本名赤塚藤雄。父藤七、母りよ、昭和10（1935）年9月14日満州（現中国東北部）古北口生まれ。6人兄弟の長男として育つ。戦後奉天から母の故郷の奈良県大和郡山の矢田村に引き揚げる。中学校在学中、手塚治虫の『ロストワールド』に影響を受け漫画家を志し、18歳で上京。昭和31（1956）年『嵐をこえて』でデビュー。その後トキワ荘に移った。昭和37（1962）年、『週刊少年サンデー』で「おそ松くん」、『りぼん』で「ひみつのアッコちゃん」の連載を開始し、一躍人気作家となった。昭和42（1967）年、『週刊少年マガジン』（講談社）にて「天才バカボン」を発表。天才ギャグ作家として時代の寵児となった。

昭和40（1965）年、東京都新宿区十二社にフジオ・プロダクションを設立。その後、昭和44（1969）年2月に代々木に移転。9月に株式会社となった。昭和45（1970）年4月19日に中落合に移転した。昭和52（1977）年に現在地に仕事場兼住居を建てている。平成10（1998）年、紫綬褒章を受章。平成14（2002）年4月、検査入院中に脳内出血を起こし倒れ、一切の創作活動を休止、平成20（2008）年8月2日、肺炎のため順天堂大学医学部附属順天堂医院にて72歳で死去した。

現在、中落合一丁目に所在するフジオプロダクションは前述のとおり、昭和40（1965）年、東京都新宿区十二社に設立された。昭和44（1969）年9月27日に株式会社となり、昭和52（1977）年に現在地に仕事場兼住居が建設され、赤塚は漫画家としての後半生を過ごした。現在では、赤塚不二夫作品に関する著作権管理・運営、マンガ出版、企画、展覧会等に関する著作物使用業務全般、インターネット、携帯電話向け事業のライセンス、広告・販促および商品化のキャラクターライセンスを事業としている³⁰⁾。

赤塚が描いたマンガ『天才バカボン』に登場するバカボン一家の居住地の設定は中落合となっている。原作マンガ中ではこのことに幾度も触れており、中落合界隈に実在する店舗名もしばしば登場した。（現在でもそのつながりを示す絵や写真などがいくつかの店舗には残されている。）地域の商店街である中井商工会と中井商友会の旗にも『天才バカボン』のキャラクターである「バカボンのパパ」が描かれていたことがある。また、古くは「中ノ（野）道」あるいは「下の道」と呼ばれた崖線沿いの道（中落合一丁目3～中井二丁目30）に新宿区が道路通称名をつけた際は、中井商店街にちなんだ「中井通り」という名称に平成21（2009）年12月25日決定した。道路通称名については、平成21年5月25日～6月30日に道路の通称名が公募されているが、「赤塚通り」や「バカボン通り」という案も出たという³¹⁾。賛否両論あるであろうが、落合地域に親しまれるゆかりの深い文化の一つである。

IV. 落合遺跡と地域文化

1. 落合遺跡の発掘調査史

落合遺跡は、遺跡として周知されるようになって百年以上の歴史を持つ。この落合遺跡に関する発掘をとまなう学術的な先行研究としては、まず、明治38（1905）年に鈴木辰造氏によって葛ヶ谷御霊神社周辺で採取された石斧などが報告され、落合台地上の遺跡が注目されるきっかけとなった³²⁾。また、大正13（1924）年に小松真一氏によって落合村下落合（現下落合二丁目）の丘陵で発掘された竪穴住居跡の報告³³⁾は新宿区内で最初に発見された竪穴住居跡の報告である。昭和3（1928）年に出された『日本石器時代遺物発見地名表』の増訂第五版の追補一には新宿区内の遺跡が掲載されており、落合遺跡もその中に記載されている。近代においては既に遺跡として認知されていたことを物語っているといえよう。

目白学園校地内の目白学園遺跡に関する調査研究としては、昭和25（1950）年の國學院大学考古学研究室による校庭内の発掘調査発見以来、平成21（2009）年まで14次にわたる発掘調査が実施され、神田川流域における縄文・弥生・奈良時代の複合集落遺跡であることが明らかになっている。最新の調査である第14次調査は図書館新築工事に伴い実施され、竪穴住居跡4軒、土坑3基、近世以降の溝状遺構3条、ピット20基が検出され、縄文土器1,566点、弥生土器141点、石器21点、剥片14点、古代の土師器125点、須恵器2点、近世以降の遺物14点、礫459点が出土している³⁴⁾。

2. 地域文化の核としての落合遺跡

この落合遺跡（目白学園遺跡）の普及公開を目的として平成12（2000）年より目白研心遺跡フェスタ（第9回までは目白学園遺跡フェスタ。第10回より校名変更に伴い目白研心遺跡フェスタ。）を実施している。この遺跡フェスタについては、拙稿³⁵⁾でその目的、実施にいたる経緯、事業内容についてまとめている。

遺跡フェスタのねらいとしては、その開催当初より「目白学園遺跡資料室の見学や講演会、各種体験コーナーなどからなる「目白学園遺跡フェスタ」を周辺地域を対象に実施することにより落合遺跡の普及・公開をはかるとともに、目白学園と地域との結びつきをより深め、地域の活性化の契機としたい。また、近隣小・中学校に対しては地域との連携を深める目的を持ち、「総合的な学習の時間」のための研修の場としてや、今後の児童・生徒の社会科見学会などに、より積極的に活用してもらおう契機としたいと考え、本企画の実施を計画した。」³⁶⁾ということを目的としている。出土資料の見学、講演会、各種体験コーナーを3つの柱として遺跡の普及・公開をはかると、それによって学校と地域の結びつきをより深め、地域活性化につなげていくこと、近隣の小・中学校の児童・生徒・教員により積極的に遺跡の活用をはかってもらう契機とすることの3点を実施の目的として考えている。これら実施の目的は有機的に結合して歴史にちなんだ体験活動と学習活動を軸にした地域活性化事業として、現在では地域にも広く認知された社会的活動として地域住民にも期待されており、地域文化の一つの核となってい

ると自負している。第12回となった平成23年度の遺跡フェスタでは、3月に発生した東日本大震災をうけて落合地域と東北地方の古くからのつながりを考えながらの実施となった。

目白研心中学校高等学校の建つ場所は律令制の頃、武蔵国に属するムラ（＝落合遺跡）があり、古代の人々が土器づくりなどをして生活していた。東日本大震災で大きな被害にあった宮城県にある御駒堂遺跡からは東北自動車道建設の際に、落合遺跡と同じ型式の住居跡や土器が出土している。7世紀から8世紀にかけて、ヤマト政権は「蝦夷」の勢力下にあった東北地方に律令制を浸透させていく。その過程において関東地方の人々が東北に移住し、東北経営の一端を担っていた。

このような落合遺跡の発掘成果から、古代の東北と関東の関わりを理解すべく、「今、私たちにできること。地域の遺跡を活用した被災地支援。」ということで、12回目の遺跡フェスタは、古代からの東北地方とのつながりに思いをはせて ーがんばろう日本!! 落合と東北とのつながりー のサブタイトルのもと実施した。落合と震災で被害のあった東北とのかかわりを考え「絆」を深められればとして今回の遺跡フェスタの講演会も石神井公園ふるさと文化館館長の小金井靖氏に依頼し「古代の東北と落合」のタイトルで実施し好評を博した。また、各催しなどで参加費・材料費を募ってその全額を義援金として日本赤十字社を通じて寄付した。その総額は70,367円となった。

V. まとめ

私たちはさまざまに地域からの恩恵を受け、地域の中で生きている。地域の歴史、文化、伝承、風土、伝統行事などは、その恩恵を実感できる身近な地域素材である。児童生徒の体験活動の不足がさげられる昨今、身近な地域素材を生かし、体験の場を増やすことは、私たちが生活する地域の素晴らしさや克服すべき課題を発見し、また再認識することにつながる。

そのためにも教師は地域を歩き、地域独自の文化に常にアンテナを張り巡らせ感受性を高め、地域の特色を掘り起こそうとする努力が必要となる。地域の学習の前提として教師が地域の課題を把握し、追求する姿勢を示す必要があり、学びのロールモデルとなることが地域を学ぶ際の教師の基本的な姿勢であろう。地域素材に対してどのように関わるかという教師の姿勢が最重要となる。そして児童生徒が学習を通じてこれら活動に関わることで、現実社会の課題と向き合うこととなり、地域社会の新たな担い手になりうる。教師（学校）、児童生徒が地域の人々と課題に共に取り組む協働が必要である。

人は地域の中で生まれ、生活し、成長する。地域の中の「歴史・文化」とそれを生み出し、はぐくみ作り上げてきた人々とのかかわりの中で、児童生徒も自己を見つめ、自己実現をはかろうとする。地域社会の持つ意義は大きく、地域素材をもとにしての教材の開発の意義もそこにある。地域素材は親しみやすく、地域の人々の心にきわめて近い存在であり、人々の感性を揺さぶりうるものである。地域の「歴史・文化」をすくい上げたすぐれた教材は、児童生徒、学校、ひいては地域に元気に豊かにする。そして力を与える。新たな地域社会の担い手を作

り出す源となる。

愛郷心については愛国心と合わせ新教育基本法にも強調されるものであるが、3.11後の地域学習のあり方について考えてみると、愛国心と結びつくような愛郷心というよりもむしろ、私たちが暮らす「まちがすき」というシンプルな心の動きをいかに掘り起こすかということが大切になってくるだろう。地域素材を活用しての感性を揺さぶる活動である。落合地域についていえば、ここに暮らした林美美子も赤塚不二夫も落合がすきだったはずだ。このことは、その残された作品群から十分うかがい知ることができる。佐伯祐三を含め林美美子も赤塚不二夫もその残した作品群は「まちがすき」というシンプルな心の動きを掘り起こすに十分な地域素材となりうる。地場産業たる染色業や地域の遺跡についても同様である。作品に残る落合の様子から、過去から現在への変化を実感して落合の歴史を探る活動、そして「まちがすき」をはぐくんでいく活動、言い換えればまちに対する誇りであり愛着がはぐくめるような活動が大切である。未曾有の災害の中、東北地方では故郷たる地域を離れざるをえない人も多量中、このような議論はそもそも成り立たないのかもしれないが、それにもかかわらず「まちがすき」という心の動きを求めていくのが、殊に3.11後の地域学習であろう。

【註】

- 1) 『小学校学習指導要領解説 社会編』平成20年 文部科学省 p119
- 2) 『同上』 p120
- 3) 拙稿 「授業で使える近世落合の史料—近世落合の特質と地域を学ぶ意義—」 『目白大学短期大学部紀要』第47号 平成23年 p39～51
- 4) 新宿区 『新宿区史』昭和30年 p512
- 5) 新宿区都市計画部地区計画課 『新宿区景観まちづくりガイドブック』(08落合第二地区) 平成22年 p8
- 6) 新宿区 『新修新宿区史』昭和42年 p199
- 7) 落合町誌刊行会 『落合町誌』昭和7年 p199～200
- 8) 東京府豊多摩郡役所 『東京府豊多摩郡誌』大正5年 p777
- 8) 『日本地理大系 第3巻 大東京編』改造社 昭和5年 p119
- 9) 朝日新聞社会部 『神田川』未来社 昭和57年 p162
- 11) 『神田川』朝日新聞社会部 未来社 昭和57年 p163～164
- 12) 『新宿区史』昭和30年 p958
- 13) 新宿区 『新宿区史』第2巻 平成10年 新宿区 p425
- 14) 『同上』第2巻 平成10年 新宿区 p425
- 15) 新宿区染色協議会ホームページ <http://www.tokyo-somemono.com/>
- 15) 染めの小道ホームページ <http://www.somenokomichi.com/index.html>
- 17) 公益法人新宿未来創造財団 「新宿区立佐伯祐三アトリエ記念館リーフレット」
- 18) 新宿区ホームページ http://www.city.shinjuku.lg.jp/kanko/bunka02_001005.html
- 19) 城北学園(目白学園) 近くの夕暮れ <http://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2007-01-12>
- 20) 下落合を歩く佐伯祐三 —「下落合風景」の描画ポイントをたどる— <http://www006.upp.so-net.ne.jp/jsc/watashino/saeki.htm>
- 21) 新宿歴史博物館 平成21年度 新宿歴史博物館特別展図録『佐伯祐三 —下落合の風景—』平成22

- 年 p58
- 22) 林芙美子 「家をつくるにあたって」 新宿歴史博物館 『林芙美子記念館』 平成5年 p3
 - 23) 『同上』 p5
 - 24) 武藤康史編 『林芙美子随筆集』 岩波文庫 平成15年 p7～8
 - 25) 『同上』 p13
 - 26) 『同上』 p13～14
 - 27) 『同上』 p24～25
 - 28) 『同上』 p26
 - 29) 『同上』 p117
 - 30) フジオプロダクションホームページ <http://www.fujio-pro.co.jp/about/prof.html>
 - 31) 「アビラ村」にバツケ坂や蘭塔坂が復活 <http://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2011-02-10>
 - 32) 鈴木辰造 「石器時代遺物の新発見地」 『考古界』 第4編第9号 考古学会 明治38年
 - 33) 小松真一 「金滓を出す豎穴遺跡」 『人類学雑誌』 第39巻第7・8・9号 東京人類学会 大正13年
 - 34) 大成エンジニアリング株式会社 『落合遺跡V—学校法人目白学園図書館新築計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 学校法人目白学園 平成22年 p7
 - 35) 拙稿 「目白学園遺跡フェスタの取り組み—地域文化の核となる学校をめざして—」 『目白大学短期大学部研究紀要』 第44号 平成20年 p181～192
 - 36) 『同上』 p183